



〔新しい を創る〕
～自分・家族・仲間・隣(となり)人・保育園・私～

私たち(社福)童心会の訓えのなかに次のような言葉があります。

Change
 変わること 改めること
 そして
 新しいを 創(はじ)めること

私の好きな言葉に”無常”(すべてのものが刻々と移りゆく、
 常なるもの(常住)は、永遠に存在することはない)という意味の言葉があります。
 私の人生をふり返ってみても、「時代の変化、社会の変動、価値観の多様化、科学の進化」
 に見舞われながら生活してきたように思います。

改めて考えてみると、30年前頃からこの世の中の移り変わりが早まったような気がします。
 それは大型の携帯電話、パソコン、スマホ、インターネット、ロボット、AIなどの出現から、
 人間としての生き方を問い返さなければならないような大きな事態が生まれてきています。
 だから私たちの乳幼児保育や幼児教育も時代の変化や社会の変動(科学の変化)に対応して
 変わらざるを得なくなりました。

1973年4月、第二次ベビーブームの真っ只中で
 茨城県下館市(現:筑西市)に定員60名の小さな保育園が生まれました。
 そして私はまだ保育界でも「0歳児の保育」に取り組まない時代から「保育に欠ける家庭の子ども」だけではなく
 「保育を必要とする家庭の子ども」と「五感を刺激する0歳からの人間教育」に取り組んできたのです。

また、世界的な時勢の動きや時代の潮流を捉えてみると、2001年にOECD(経済協力機構)から
 発表された保育白書の中では「乳児は有能な学習者である」と言っています。
 そして保育白書のサブタイトルはECEC(Early Childhood Education and Care)と書いてありました。



笑ったかす一番 だっこされたかす一番 やさしくされたかす一番
 遊んだかす一番 でかけたかす一番 チャレンジしたかす一番

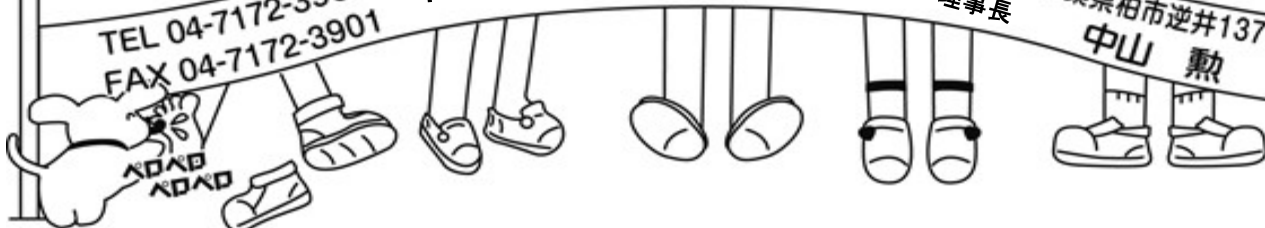


E-mail doushinkai@doushinkai.jp URL <http://doushinkai.jp>

社会福祉法人 童心会

TEL 04-7172-3939
 FAX 04-7172-3901

〒277-0042 千葉県柏市逆井1377番地1
 理事長 中山 勲



また、2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・J・ヘックマンも乳幼児期から教育の機会を得て非認知能力を身につけると大人になっても「より良い幸せな社会生活」を送れる人が多い事を長期の追跡・調査を通して発表しました。

日本でも1995年京都大学にfMRI(磁気共鳴機能画像法)が導入されてから脳科学の進化が著しくなり、脳内ホルモンの活用も、童心会では日常生活の中で常態化するようになりました。

脳内ホルモンの活用

- 1) 幸せホルモン セロトニン(笑顔、挨拶、がんばれ、おめでとう、ありがとう)
 - ・いたわり、はげまし、思いやりの心にもセロトニンが分泌される
- 2) 愛情ホルモン オキシトシン(先生のだきしめ言葉)
 - ・ふれあい、見まもり、思いやりにもオキシトシンが分泌される
- 3) 睡眠ホルモン メラトニン(たくさん遊んで メラトニン)
 - ・お日さまと仲よこよしで メラトニン
- 4) やる気ホルモン ドーパミン(喜びの感情、快感が生まれる)
 - ・やる気、げん気、ほん気が生まれた運動会

だから私たち保育所(child day care)の機能と役割も対応が変わらざるを得なかったのです。

乳幼児の保育・幼児教育は、昔の子どもの世話から「子どもを導く技術と学問」になり、

近代教育学は「人間性の調和的発展を目指すこと」になったのです。

しかし私たち(社福)童心会として最前線の臨床保育の現場にいるものとしては

「人間学と人間科学に基づく人間教育」に添った視座に立たなければならないと思ったのです。

即ち、人間学的には2000年以上前から伝えられてきた訓え、人とひととが社会生活を営むための智慧

「実人生を生き抜く力」が求められたのです。

やがてそれらが集大成されて「人間として如何に生きるべきか」が問われ、訓えとなり

宗教にまで発展したのではないかと私は考えているのです。

改めて私たちが道しるべとして目指している

「Well-being 幸せになろうね！幸せになろうよ！」は次のような人が身につけられる宝物なのです。

- 1) 笑顔 : とびっきりの笑顔があふれる家庭・保育園・地域社会
- 2) 挨拶 : 明るいアイサツが朝から飛び交う家族・保育園・地域社会
- 3) 思いやり : 慈悲(すべてのものの喜びや悲しみに寄りそう心)穏やかで大らかな心
- 4) 感謝 : 生きとし活けるものすべてにありがとうの心を忘れない

改めて私たちは、今自分たちが執り行っている大義を見つめた時、

乳幼児の保育、乳幼児の教育という狭い視野だけで見るのではなく

人間教育という生まれた時から死を迎える時までの「生涯学習・生涯教育」という視座から

捉えていかなければならない時代になっていると思っています。

日本の古い諺の中にあつた「三つ子の魂百まで」という言葉も

「つのつく歳までは神の子(9つ:ここのつ)」という古い諺も、脳科学では次のように言われています。

脳にどのような神経回路が形成されるかという点は、

遺伝的な要素と幼少時代の環境によって決まるというのです。

何に対して怒りを覚え、どんなことに喜びを感じるかは、脳の深部に3歳まで絶対忘れない記憶となり、

最も遅い前頭葉も8歳から10歳くらいまでに神経回路が形成されるというのです。

言い換えると10歳までの記憶がアイデンティティ(identity 主体的・自分らしさ)を作っていくのだそうです。

改めて保護者の皆さまと私たちの存在意義は、

子どもがまだ小さいうちに「人生はこんなに楽しいものだ」ということを刷り込み、

「自分の存在を皆が喜んでくれるのだ」という経験を

一生絶対忘れない記憶として、人生最大の財産として残してあげることなのだ、と確信したのです。

これから長い長いお付き合いになりますね。

どうぞよろしくご協力をお願いいたします。

令和6年 5月 吉日
社会福祉法人 童心会
理事長 中山 勲